

敬愛短大附属幼稚園だより 1月号



歌舞伎は日本の伝統芸能です



あけましておめでとうございます。本年もよろしく願い申し上げます。今回は日本の伝統芸能について考えてみたいと思います。歌舞伎俳優である中村吉右衛門さんの対談を要約してのせています。人を感動させるものは、技でなく心であることにも興味をもって読みました。

○創造性と歌舞伎

そもそも古典といっても、それが初めて行われたときは、それはそのときの創造性の結果なのです。そこでできたいいものを残し、悪いものを捨てていく。その作業を続けると皆さんがいいなと思うものが残っていく。「型」など昔から続いている様々な約束事も、このような創造性が集まったものなのです。

「型」というのは、我々歌舞伎の場合は「名優の型」、演出のことなんです。その芝居をどう解釈して、皆さんに喜んでいただけたかということですね。これは相当な型＝演出ですので、時代が変わっても、そのまま通じます。まあ、ものすごく時代が変わると、さすがに合わなくなってくることもありますが、伝統歌舞伎を継承する役者としては、そのまま伝えていくことが一つの義務です。

そして、受け継ぐことが新しい発想をすることにつながるのです。絵もそうだと思いますが、古典的な技術から学んだ上で、自分ならこう描きたいということをやめるのですよね。何から何まですべてを捨てて新しく描くというのではないでしょう。

○「性根」と歌舞伎

演劇における技というのは、あるレベルまでは肉体的訓練、声の訓練なのでどうにかかります。お稽古というのは当然すべき義務であって、そこから上は別のものであります。器用だからお客様を感動させられるということではないのです。不器用だけれど、お客様を感動させるということがあるわけです。

何が違うのかと突き詰めていくと、結局ハートですね。どういうハートをもって演じているかということです。どこまで人物の心をつかんでいるか、人物に心が入っているかということです。教えようと思って教えられる問題ではありません。「性根」という言葉を我々は使うのですが、それは役の心をつかんでいるか、いないかという意味です。

その「性根」が大切であって、どういう形をとればいいのかは訓練の中で体得したことをやればいわけです。訓練していれば形はできる。でも演技が抜きこめるためには心が必要になるのです。踊りも見た目や体の使い方が重視されますが、最終的には心なのです。振りは同じだけど、ある方が踊ると神々しく見えたり、別の方が踊ると下世話なものにみえたりします。同じ振りなのにできる人とできない人がいるのは心の問題、感覚、感性なのです。（中村吉右衛門・歌舞伎俳優「歌舞伎から学びを考える」初等教育資料、H19.9）

幼児期にどんな遊びや体験をすることが必要なのでしょうか。子どもには自分で育つ力があります。自分で学び、その中で心が育ちます。私たちにできることは、よりよい環境を用意することです。（山中 護）